

青年海外協力隊との出会いと 自分自身と向き合った ベトナムでの2年間

青年海外協力隊との出会い

1. 中学生のころからの思い

私が初めて青年海外協力隊に興味を持ったのは中学生の時である。青年海外協力隊募集のポスターを見て「これだ！」と心に響くものを感じ、帰宅早々に母親に興奮しながら「20歳になったら協力隊に行く」と伝えた記憶がある。「あんな危険なところ、行つては駄目」と即反対された。

多感な中学生で、ついネガティブにものを考えることも多かったが、時々テレビで見るアフリカの貧困や中東の情勢は子供ながらに胸が痛く、家族がいて学校に行けて毎日食べ物に困らない私でさえ、こんなに悩みがあるのに、家族もなく学校にも行け

ず、毎日食べ物を心配する人達は一体何を考えながら暮らしているのだろうか、どんなに悩みを抱えているのだろうか、という疑問が常に頭にあった。「今月も赤字」が口癖の母が被災地への募金や途上国への募金は定期的にすることを幼いころから見ているのではないかという期待もあった。そしてテレビに映る彼らの姿や声は本当に彼らの生活を反映しているのだろうかという漠然とした疑問があり、いつか直接この目でその地を見てみたい、彼らと直接話したいと考えるようになった。

2. 海外留学を経て

岡山県倉敷市の片田舎で兼業農家を営む家に3人娘の長女として育った。小さいころから祖父や父は私に「大きくなったら跡継



森田 裕子

JICA（独立行政法人国際協力機構）
ベトナム事務所企画調査員

【もりた ゆうこ】高校卒業後、米国大学留学。民間会社勤務を経て青年海外協力隊員としてベトナムへ赴任。JICA専門家（ベトナム参加型農村開発プロジェクト）を経て2012年4月よりJICAベトナム事務所にて企画調査員を務める。

ぎ」と言う。その響きに反抗心を抱き、田舎では決して会えないような国籍の人に会ってみたい、世界各国の人々の考え方を聞いてみたいという思いが幼いころから強かった。海外留学を志望し続ける私は、日本の大学を出てからじゃないと就職はできないぞ、と高校の教師に言われ、母親にも考え直すよう説得されたが、18歳から22歳で考え方はかなり影響を受けるはずだから色んな考え方に出会って視野の広い人間になりたい、と周囲の反対を押し切ってカリフォルニアの大学へ留学した。父親の最終的な一言は「いいじゃないか、行って来い。その代わりに自分で決めたのだから卒業するまで絶対に帰ってくるな」という厳しくて優しい言葉であった。

大学時代の専攻は「国際学」と「仏語学」。仏語はグルメ好きが高じたことと、ア

フリカ行きを念頭に置き専攻した。国際学専攻の一環で文化人類学や開発学を学び、中学生のころ、夢見ていた青年海外協力隊のような活動が仕事として多種存在することを知った。それまでは一般企業に勤めながら空いた時間を利用してNGO等でボランティアをすることでしか国際協力に貢献できないという漠然としたイメージがあったから、夢が広がった気持ちになったことを覚えていいる。

3. 日本発の国際協力を意識

アメリカにはPeace Corpsという制度が存在する。日本の青年海外協力隊のようなもので、其々の国ごとに母国の国旗を背負ってボランティアをする制度だ。日本にいと自分が日本人ということを超えて意識しなかったが、海外で暮らすと会話は「どこから来たの」から始まるため、嫌というほど自分は日本人であることを意識し、自分の言動が日本人一般としての言動として映ることも認識した。

海外での暮らしは、今までにない多くの出会いをもたらし、好奇心を刺激され、自分の可能性をどこまでも広げられるような感覚に捉われることがあった。と同時に自分は非常に脆弱で、足元の定まらない人間だという不安感がこみ上げることもあった。

その後の色々な出会いもきつかけとなり、自分のアイデンティティときちんと向き合いい、まずは日本社会で社会人を経験し、日

本人として国際協力に参加したいと考えるようになった。国際協力に従事するからには理論のみで頭でっかちな一方的な援助ではなく、地に足のついた協力をしたい。加えて自分自身がこの分野で生きていくのに適当な人材かどうか見極めることも含め、最初の一步として長年の夢であった青年海外協力隊へ応募することを決めた。

ベトナムで青年海外協力隊員として

1. ベトナムへの赴任

このような経緯を経て、青年海外協力隊に応募したのが社会人2年目を過ぎたころである。当時は半年に1回の応募であり、落ちたら無職のまま次の応募まで待つ覚悟で退職した。運よく1回で合格したが、希望していた仏語圏アフリカとは裏腹に赴任先はベトナムであった。この期に及んでも青年海外協力隊参加を反対していた母親は、日本から近く、観光客も増えつつあるベトナムへの赴任ということで安心したようだった。

2006年6月末から2年間、私は「村落開発普及員」という職種でベトナムの首都ハノイより北東部55kmに位置するバクザン省へ赴任した。省は日本で県に該当する。配属先はバクザン省首都バクザン市内に位置するズインケ村の村役場である。村の面積は

466ヘクタールで、約2300世帯、約9300人(2006年当時)が住んでいた。

2. 赴任当初の戸惑い

ベトナムではここ数年、国全体が工事中と言っても過言ではないほど、「工業化」の名目の下、ものすごい勢いで風景が変わっている。ラジオでも、テレビでも、新聞でも「発展」という言葉を聞かない日はない。首都に比較的近いバクザン省も建設ラッシュに伴い農業地が日々減少していく。省都の外れに位置する私の任地も例外ではなく、省の開発計画により2020年までに村内の農業地がなくなる予定であるため、もはや「村落」という言葉は適さない。

余りにイメージと異なる現地の状況に面喰い、こんなに開発ラッシュが進む地域で一体私に何ができるのだろうかかと絶望感に捉われた。加えて、赴任当初はベトナム語も全く理解できず話しても通じない。プライベートが尊重されず、外国人と見れば値段を騙してくるベトナム人が大嫌いになり、赴任した目的を見失いかけた。

そんな時、私を支えてくれたのは協力隊仲間であり、弱音を吐く姉を強く叱ってくれた妹達だった。日本から協力隊事業を支えてくれる顧問の先生方からの「自分自身を奮い立たせろ」という言葉も支えになった。それは世界中の協力隊員宛に送付されたメールだったが、意識的・無意識的に逃げ場をつくらうとしていたことを指摘されたよう

で頭を金槌でたたかれた気分であった。

3. 生活環境

私は村内の一軒家を間借りし、ホームステイで暮らした。赴任前には穴のみの屋外トイレやバケツに汲んできた水でのシャワーといった生活になるのだろう、と覚悟をしていたが、省都近くに位置することもありステイ先には水洗トイレがあり、お湯も少量ながら使えて非常に驚いた。

一方、ベトナム北部の生活環境は非常に不快なものであった。春夏は高温多湿でパソコンのコードや画面までカビが生える。40℃近い気温で湿度が90%を超える夏は水浴びを1日3回し、蚊帳に扇風機を入れ氷枕をしても寝つけない。どんどん体力が消耗していくのが分かる。冬は冬でベトナム北部は時に5℃くらいまで気温が下がる。私が赴任した2年目は、家畜が大量に死に、学校が連日閉鎖されるほど（ベトナムでは10℃以下になると休校となる）記録的に低温が続いた。日本で10℃と聞くと大して寒い印象はないが、ベトナムの田舎の家に暖房器具はなく、隙間風も入ってくるため、家の内外で温度差がないばかりか、タイヤ張りで体感温度はさらに下がる。私は生まれて初めて霜焼けになった。夜もセーターなどを5枚重ねて毛布にくるまっても寒くて寝られず、体中が筋肉痛になった。買い込んだろうそくにあたりうち、霜焼けの足を火に近づけすぎて靴下を数枚焦がしたこともある。

冷房があつたら、洗濯機があつたら、という欲が出てくることは多く、快適な暮らしを当然と思っていた自分を恥ずかしく感じることもあつた。しかし、こういった暮らしがあつたことで洗濯機や冷暖房機器の発明に心底感謝することができた。断水や停電、大雨後の浸水が日常的に起こることを知り、電気の安定供給や下水道の存在は当たり前でないことを理解できたおかげで、感謝できる対象が増えたように思う。

「郷に入れば郷に従え」とはよく言ったもので、現地ベトナム人と同じように生活をしている限り、毎日平和に過ぎていく。マイナス思考だと自分が疲れるからか、人間というのは上手くつくられていくからか、無いものを探すよりも有るものに感謝できるようにになった。また、停電や断水の時の対処方法にも少しずつ工夫を加え、だんだんこういった生活も楽しくなっていた。

4. 「村落開発普及員」としての活動

(1) 活動開始に至るまで

私は「村落開発普及員」として何らかの活動を期待されて赴任しているはずである。それにもかかわらず、赴任当初、配属先である村人民委員会（村役場に相当）は外国人の安全を守らなければという責任からか、保守的な北部の農村の問題を外国人に知られたくないからか、人民委員会から外出することを禁じられた。しかし、それでは村の現状は全く把握できない。行事があると歌え、

飲めと歓迎されるのに、仕事の相談となるとたらい回しにされることに憤りを覚えた。

同時に、なぜそのような対応なのかを自分なりに考えた。もし私の田舎に、経験が浅く自分の地域を知らない外国人が勝手にやってきて村の問題を知りたいといった時、どんな気持ちがあるだろうか。すると自分の考えが一方的で偏っていたことに気付いた。非常に恥ずかしくなった。むしろそれにもかかわらず受け入れてくれ、色々な行事に人民委員会職員として招待してもらっていることは感謝すべきことだと気付いた。そして、どうすれば配属先の同僚が私の活動に興味を持ってくれるかを考えた。とにかく不快感を取り除く必要がある。また興味深いと思わせる必要がある。私の意図や各活動の目的を明確化し、一連の流れが相手に理解できるよう伝え方を工夫する必要もある。

さらに、独りよがりの活動にならないためには、まず、この目で村の現状を見て、直接住民と対話をする必要があると感じた。上からの命令（特に書面）でしか動かない社会の仕組みを活用し、村人民委員会委員長から各集落長宛に日本人ボランティアのフィールド調査に同行する旨のレターを送付してもらい、全11集落内の198世帯を訪問した。訪問に先立ち調査票案を作成し、人民委員会幹部にも目を通してもらった。これを機に活動を知らざるを得なくなった方も多い。いつも嬉しそうに職場を出て自転車で集落へ向かう私を見て、「今日は何



配属先人民委員会で部屋を共有している共産党大衆組織女性連合から教えてもらった環境の歌をリコーダーを吹き、こどもたちが歌う。一方的に「してはいけない」ことを伝える教育は心に響きにくい。外国人と歌う環境の歌の話から何か学べればという期待がある

軒回ったんだ」が挨拶になった。

ほとんどベトナム語が話せず聞けない私と無給で付き合うはめになった集落長の中には、集落内の訪問は許可しても最初から一切同行しない人、他の人に依頼する人、同行する者の答えを誘導して早く切り上げようとする人、丁寧に私の意図を汲んで説明してくれる人など様々であった。それでも軟禁に近い赴任当初に比べれば村を歩き回れている幸せがあった。それに同じ質問を198回話せばベトナム語にも慣れる。200世帯以上の家庭をお邪魔した貴重な機会は、人間関係を構築し、村の生活を考察するのに有益すぎるほどであった。

(2) 小学校での文化交流・環境教育

この調査と並行して、私は小学校訪問を開始した。私自身、国際協力に興味を持ったのは幼いころの異文化への興味だったことから、私の訪問が何かのきっかけになればという思いと、個人的に教育に関心を持っていたからである。

最初は「日本ってどんな国」と題して模造紙に絵を書いたりリコーダーで歌を紹介したり折り紙と一緒に作った。週1回

の訪問はあつという間に拡がり始め、最初は懐疑的であった人民委員会委員長や小学校長も少しずつ定期的な活動として認めてくれた。何より保護者達からの不信感がなくなり、調査中に「子供から話を聞いたわよ」と親近感を持って接してくれる人が出始めたのは大きな収穫であった。

赴任後1年が過ぎたころから、小学校での交流内容に環境教育も取り入れた。その他、出身地である岡山県庁国際課の協力の下、ピアノを10台提供いただき、歌の練習時に使い方を一緒に教えたり、私の出身校である倉敷市の小学校と絵画を通じた交流を実現させたりした。

(3) 調査結果と外部者の役割

フィールド調査の結果、村の一番の関心は「食品の安全」「生活環境問題」であった。「収入向上」という私の予想とは異なる結果だった。ベトナム北部では急激な工業化、乱開発が進み、目に見えて農業地が減り、水質が悪化し、省都からの工業排水が農業用水に流れこむ集落もある。「健康でない」と仕事ができない。仕事ができないと収入が得られない」という台詞を何回も聞いた。調査で話をしているといつしか悩み相談室のようになり、ここでは書けないような社会の複雑な仕組みや困難を詳細に聞き続けることもあった。このような貴重な機会を通じ、やはり外部者の思い込みは怖いと感じ、うわべの理解だけで活動を始めてはいけない

と強く実感した。

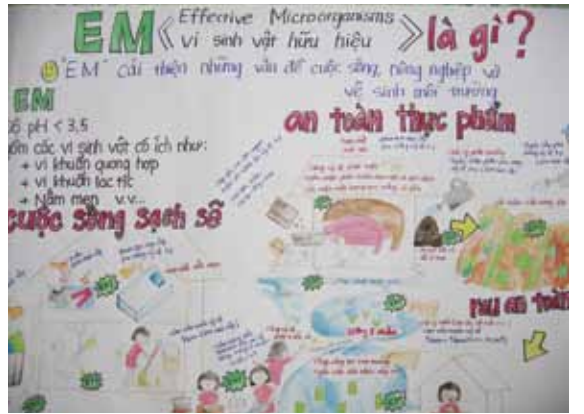
調査結果を報告書にまとめ、省レベルを含めた関係機関に送付した。元々の隊員要請理由であった「手工業発展への提言」について当初は優先的に進める予定で相談していたが、いつもたらい回しにされる。そのため、本当に「手工業発展への提言」が必要な活動なのか自問し始めた。私は意見や提案内容を報告書に詳細に記載し、しばらく様子を見ることにした。

「コミュニティ開発」に携わるものとして任地での役割を考え直すうちに、村落を何らかの形で「開発」するために派遣されているのではなく、「村落」が開発されていく過程で生じる様々な問題に対する対処法を提示したり、そのためのイニシアティブを隊員がファシリテートしたりするために派遣されているのだと理解するようになった。そうすると、活動案は無限にあると感じるようになった。

例えば、視点を変えると「環境汚染による身体への影響」二つに対しても、情報提供、改善案紹介、問題提起など様々な活動案が見え、自身のアプローチや取り組み次第で、できることは無数にある。任地に入ってから毎日の試行錯誤の中で仕事をしていくことは村落開発普及員としての活動の大変なところでもあるが、現地のニーズや状況、反応に合わせて柔軟に対応することができると感じました。

各集落にて実施したセミナーの一環で、参加者と共に微生物資材を用いた団子を作る（写真上）

周囲の方の興味をひき、ベトナム語およびイメージを伝える補足ツールとして赴任中ポスターを描き続けた（写真下）



一方、何百年、何千年の歴史のある村社会で、新しいことをゼロから起こすことを考えた時、正直、足のすくむ思いもした。始めれば上手くいくかもしれないが、完全に失敗するかもしれない。逃げ腰になったが、何かに突き動かされたように、突然体が動き始めたことを覚えている。

青年海外協力隊活動を通して学んだこと

1. 「ボランティア」という立場だから見えてきたこと

基本的に青年海外協力隊員が現地です活動をするにあたり、活動経費に該当するも

のではない。どういった援助実施機関であれ、ある社会を改善し発展させていくという目的は共通であろうが、実施前から目標・指標がはっきりしており、それに対しての資金も準備されているプロジェクトと隊員の活動はその規模において歴然たる差がある。しかしながら任地の人達にとって、その違いは理解しづらく、加えてテレビなどのメディアを通して日本のGNPやODAの額を知っている彼らにとって、抱く期待が投資など経済的なものであることも当然である。

赴任当初、何かを始めるにあたり多少なりとも資金は必要であることや、プロジェクトと頻繁に比較されることで隊員の立場を不自由に感じたこともあったが、少しずつ「無い」からこそ見えてきたこと、できてきたことを感じるようになった。一カ月、半年と時間が経つにつれ、資金援助を期待して私に頼んだり近づいてくる人が減り、私の活動に共感し、本当に何かを改善したいという問題意識の高い、やる気のある人達が集まってくれるようになった。

隊員は活動らしき取り組みが始まるまでに時間を要するが、ベトナム社会独自の指示系統や住民の性格を考慮した巻き込み方は実際現場に入らないと分からないので、任地に入ってから活動内容を必要に応じて変えられる柔軟性を利点だと感じるようになった。

これは自分自身との葛藤の中で見方が変

化してきたことも関係しているように思う。配属先は隊員を必要としていると思っていた赴任当初は、相手側の期待外れな対応に戸惑った。しかし自分を相手側の立場に置いて状況を理解しようとすると、どの反応も極自然なものであることに気がつき、どうすれば地域が必要としていることを行えるかや配属先から認めてもらえるかについて、勤務先職員や住民の反応を観察しながらアプローチをすることに徹した。そして、とにかくできることから少しずつ始めよう、人民委員会にも本来の業務があるのだから時間を割いてくれることに感謝しよう、と自分自身に言い聞かせることにした。そうすると関係者との関わり一つ一つにありがたみを感じるようになり、気持ちに余裕が出てきただけでなく、「見える」ものが増えてきた。

その過程で相手への「見せ方」も重要なポイントだと気付いた。どれだけ計画が完璧であるように見えても、それを実践するのも評価するのも人間である。住民から「利益がない」と感じられれば、それ相当の対応しか受けない。そのため、その都度微調整を加え時間をかけて反応を見ながら駆け引きのごとく進めていくことが必要になってくる。幸運にも不運にも外国人は目立つため、それを上手く利用することもできる。

そうしていくうちに、私の名前を覚えようとして「味の素」「ホンダ」等色々な名前をつけては笑っていた同僚や懐疑的な目



環境改善セミナー開催時、集落内の池や井戸の水質を検査。自分の水田に流れ込む水質となると顔が真剣になる。結果を基に、井戸の近くで洗剤を多量に用いていたことをあらわす反応も。改善方法を参加者で考える

で私のすることを見ていた人達が、ある時を境に活動に関心を示し、関わり、他の人達に伝えてくれるようになってきた。

隊員としての役割や意義を考えることが多いが、このように現場レベルで人々の変化を毎日肌で感じられることは、やはり隊員ならではの醍醐味ではないだろうか。

2. 現地の方々から学んだこと

私は赴任前、開発とジェンダーの分野に興味があった。それはテレビや書籍から知り得る南アジア、中東、アフリカの女性の蔑まれた生活状況改善に何らかの形で役立ちたい、そして、その際、女性としての視点は強みになると思ったからだ。

しかしそれ以前に私は未婚であり、子供もおらず、彼らにとってみれば、発達した国の若い女性が途上国の田舎に来て女性の

活動に口出しをするようにはか映らないのではないかというジレンマに陥った。実家が米農家であることは農業を営む現地の方との関係づくりに役立ったが、未婚のため家庭生活生活についてはリアリティに欠ける。

ベトナムに滞在している間、毎日誰かに「早く結婚しろ」と言われた。最初は本当に不快であったが、彼らにとって家族が何よりも大切で

あり、心底、家族はいいものだから結婚しろと言ってくれているように聞こえ始めてからは、人間として当たり前のことを当たり前前に感じ、当たり前前の幸せを知っている彼らから学ぶことは多かった。人生の方向性に悩むこの時期にそのことを教わったのは、幸運だったと思う。

同時に情報が錯乱する中、動物的な感覚が鈍り、一人で生きていくことをどんどん快適化させ、バーチャルな出会いや付き合いに抵抗がなくなり、他人との泥臭い付き合いを面倒だと思わせてしまっている日本社会の現状に危機感を覚えた。

今までは自身の興味もあり、海外で仕事をすることしか念頭に置いていなかった。自分の国の問題に取り組まずに、他の国の村の問題を解決しようとするのは、非常に不相应に思えた。現地での生活を通し、もっと身近なところから始められるのではないかと気付かせてもらったように思う。

最後に

この2年間に体験した出来事は、どれも非常に新鮮で刺激の多いものであった。現地の人々の人間くささに翻弄され、喜怒哀楽の多い2年間であったが、任地の方達との深い付き合いを通して得たことは数知れず、感謝の想いと充実感で満たされている。活動をしながら「初めて」による大変さ、

「違う」ことによる困難に落ち込んだことも度々あるが、辛かった時期があったからこそ人の温かみを身に染みて感じ、改めて人との交流や人間関係の構築がどれほど大切かを実感した期間であった。結局は自分自身との葛藤であり、どこまで柔軟になれるか、どれだけ自分を奮い立たせられるかと、自身と向き合い続けながら過ごした時間ももあった。

外部者が暮らすコツとして常に念頭に置いたのは、自身と相手を国籍などで意識的・無意識的に区別せず「人間対人間」として付き合うこと。さらに「必要以上には期待しないながらも、できることを一生懸命」「ちよっぴり押しつつも、最後は向こうのペースで」ということ。そうすると、なぜか全てが「なるようになっていく」というか、「なるようにしかならない」というか、それが結局は村の人に適切な形になっているのではないかと感じるようになってきた。この経験と感覚は今後のどのような場面においても有益であると信じている。

最後に、このような機会を与えてくださったJICA関係者の皆様、家族として受け入れてくださったバクザン省の皆様、そして日本から応援してくれた家族に心から感謝したい。

※活動の詳細は下記URL(倉敷市ホームページ)からご覧いただけます。

<http://www.city.kurashiki.okayama.jp/dd.aspx?menuid=9685>